



東日本大震災 教育復興支援レポート 2015



公益社団法人
日本ユネスコ協会連盟

子どもたちの未来のために

東日本大震災から5年余の月日が経過しました。

本格的な復興が進む中、被災地でいまなお不自由な生活をおくられている皆さまに心よりお見舞いを申し上げます。

私ども日本ユネスコ協会連盟は、この5年間、未来を担う子どもたちの健やかな成長と豊かな学びが育まれることを願い、教育分野を中心とした復興支援活動を行ってまいりました。この間、被災された144の学校を支援し、4077名の児童・生徒に給付型の奨学金を届けました。これも、私たちの取り組みに賛同してくださった多くの募金者の皆さまのご支援の賜物と、心より感謝申し上げます。

被災地は、いまなお先の見えない不安と闘いながら生活再建の半ばにあり、教育費の捻出に苦心されているご家庭がたくさんあります。引き続き子どもたちの学びを支える支援が必要とされています。

被災による経済的な理由で子どもたちが夢や進学をあきらめることなく、安心して学校生活を送ることができるよう、また、平和で安全な社会の実現を願い、これからも支援活動を続けてまいります。

引き続き、皆さまからの変わらぬご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。



公益社団法人
日本ユネスコ協会連盟 会長
松田 昌士

松田昌士

目 次

- 01 私たちが5年間で取り組んだこと
- 02 ユネスコ協会就学支援奨学金
- 03 子どもたちはいま～奨学生インタビュー～
 - 04 「神楽で深まった地元への思い」 山本康太くん
 - 05 「夢はエレクトーンのリペアマン」 沢田里佳子さん
 - 06 「スポーツで夢のステージに行く」 山本徹くん
 - 07 「子どものころからの夢に向かって」 大友琉聖くん
 - 08 「そろばんで10段をとりたい」 長沢ほのかさん
 - 09 「機械と柔道の2本柱でいきます!」 長友明宏くん
- 10 被災地から「ありがとう！」
- 12 継続的な支援に子どもたちの未来への想いを込めて
- 14 MUFG・ユネスコ協会 東日本大震災復興育英基金
- 16 アクサ ユネスコ協会 減災教育プログラム
- 18 コラム
- 19 会計報告
- 20 感謝を込めて

東日本大震災子ども支援募金

私たちが 5年間で 取り組んだこと

学校への緊急物資支援

2011年度

学校を再開するために、まず行ったのが緊急物資支援でした。被災により学習に必要な備品が流出してしまったため、学校毎のニーズにあわせて、教材類や体育用具など、柔軟に支援しました。また、仮設住宅や避難所と学校をつなぐスクールバスも届きました。

支援実績

幼・小・中・高144校、2教育委員会

心のケア支援

2011年度～2015年度

地震と津波への恐怖から強い不安を抱いた子どもたちの、心理的ストレスをやわらげるために、夏休みにキャンプや絵画コンテストなどを実施しました。

支援実績

ユネスコ子どもキャンプ：参加者54名
子ども絵画コンテスト：参加者2958名
絵本の読み聞かせ会／震災復興研修会：参加者30名（教職員）
コンサート開催、子どもたちとのふれあい支援、辞書引き学習支援、
学習旅行支援

文化・郷土芸能への支援

2011年度～2013年度

震災によって危機に瀕した東北の祭り・文化を救ってほしい。被災地の声を受けて、人びとの気持ちをつなぐ郷土芸能や祭りへの物資支援を実施しました。

支援実績

雄勝法印神楽：神楽面4面の復元と衣装や備品、ドキュメンタリー映画制作／櫻舞太鼓：短胴桶太鼓2張、締太鼓皮10枚、用具運搬車両／学校での郷土芸能教育用具／伊達の黒船太鼓衣装制作／両石虎舞・片岸虎舞支援／東前太神楽支援

社会教育・コミュニティ支援

2011年度～一部継続中

被災地では、仮設住宅で暮らすなど、生活環境が大きく変化しました。被災地のコミュニティ再生を目指して、移動図書館や学童保育所、相撲場などを支援しました。

支援実績

移動図書館車5台、学童保育所1棟、
学童保育所の物資支援3ヵ所、コミュニティ図書館1棟と備品支援、
幼稚園の物資支援1ヵ所、「心に笑顔」プロジェクト（夏の子どもキャンプ1回、補習クラス96ヵ所、道具やスポーツ用品の提供36校、実験工作教室20回）、相撲場建設2ヵ所

ユネスコ協会就学支援奨学金

2011年度～継続中

経済状況が悪化したご家庭の子どもたちが、安心して学校に通えるように返還不要の給付型奨学金を1人につき3年間にわたって支援する活動を続けています。

支援実績

奨学生2594名

» 2015年度の活動／P2-13

MUFG・ユネスコ協会 東日本大震災復興育英基金

2011年度～継続中

両親もしくはいずれかの保護者が死亡・行方不明になってしまった子どもたちを対象に、返還不要の給付型奨学金を支援しています。その他、さまざまなプログラムを通じて、子どもたちの心豊かな成長を応援しています。

支援実績

奨学生1483名

» 2015年度の活動／P14-15

アクサ ユネスコ協会 減災教育プログラム

2014年度～継続中

東日本大震災の経験や教訓を全国の学校防災につなげるため、学校への活動助成、教員研修、活動報告会を実施しています。

支援実績

活動助成41校、教員研修：参加教員65名、
活動報告会：参加教員41名、助成活動に参加した児童・生徒・
教員・保護者・地域の方々：1万3784名

» 2015年度の活動／P16-17

ユネスコ協会 就学支援奨学生

子どもたちの進学や夢を支える支援



対象者:津波による家屋の流失・損壊や原発事故の影響による避難などの理由で経済状況が著しく悪化した家庭の、高校進学を希望する中学3年生です。※震災による遺児・孤児を除きます。
対象地域:岩手、宮城、福島の3県で、被害の大きかった市町村を特定して実施しています。
支援金額と期間:奨学生一人当たり月額2万円を3年間給付します。(中学3年次から高校2年次まで)
 返還不要の奨学生です。奨学生は、子どもたちのご家庭に直接支援しています。



2015年度は、2013年度、2014年度に採用した奨学生への継続給付を行うとともに、新たに、岩沼市、多賀城市、亘理町、大熊町、新地町、富岡町、浪江町、双葉町の8つの市町で241奨学生への支援を開始しました。

受給者数:734名

支援地域:岩手県／大船渡市、宮古市、山田町

宮城県／岩沼市、多賀城市、山元町、亘理町

福島県／いわき市、大熊町、新地町、相馬市、富岡町、浪江町、双葉町

2011～2015年度までの累計受給者数:2594名(2016年3月31日現在)

※2011年度に採用した岩手県／大槌町、陸前高田市、宮城県／石巻市、気仙沼市、南三陸町、仙台市の奨学生に対しては2013年度末に、2012年度に採用した岩手県／釜石市、宮城県／東松島市、女川町、名取市、福島県／南相馬市の奨学生に対しては2014年度末にそれぞれ3年間の給付が完了しています。

被災地はいま

震災から5年。被災地では、住宅の高台移転や土地のかさ上げ工事が行われ、災害公営住宅の建設や入居が進んでいます。一方で、プレハブの応急仮設住宅での避難生活が依然として続いている奨学生もたくさんいます。さらに、現在も敷地内に仮設住宅が設置されている学校や、仮設校舎での授業を行っている学校もあります。このように不自由な環境でも、子どもたちが元気に学校に通い、通常の学校生活を送るために、奨学生は、各ご家庭で高校進学に必要な費用や高校生活のために大切に役立てられています。



広大な津波被災地では
かさ上げ工事が延々と続いている

ユネスコ協会就学支援奨学生の活動はホームページにも掲載しています。 <http://www.unesco.or.jp/kodomo/>



Case.3



Case.4



Case.5



Case.1



Case.2



Case.6

子どもたちはいま ～奨学生インタビュー～

東日本大震災から5年。

被災地ではいま多くの人が不自由な暮らしを強いられ、経済的な不安を抱えているご家庭も決して少なくない。

そんな中、子どもたちはどんな夢を描き、地元の復興をどんな思いで見つめているのだろう。

ユネスコ協会就学支援奨学生たちに話を聞いた。



部活はバレー部。毎朝、母がつくる弁当には、米2合分のご飯に、おにぎりもつけるとか。よく食べ、よく学び、よく運動する毎日だ

山 本康太くんは、福島県南相馬市で生まれ育った。しかし、震災後、福島第一原子力発電所で事故が発生したため、着の身着のまま母、友恵さんの実家がある県内の新地町に避難。町に建設された仮設住宅に入居して、もう5年が過ぎた。

いまは新地町で元気に過ごす康太くんだが、小学5年で転校するときは、辛くて仕方がないと泣いてしまったという。友恵さんは「転校したからといって、南相馬の友だちがゼロになるわけじゃない。いまの友だちにプラスして、新地の友だちができるんだよ」と一生懸命話して、やっと納得してもらったそうだ。

それからは、ひとりでバスと電車を乗り継いで南相馬の友だちの家に泊まりに行ったり、逆に向こうから仮設に泊まりに来もらったり。そんな日々を過ごすうちに、康太くんは次第に新地町になじんでいった。

地元に伝わる神楽との出会い

そして、新地に来て1年目の秋、康太くんは素晴らしい郷土芸能と出会うことになる。福田地区の諏訪神社に江戸時代から伝わる福田十二神楽だ。

「友だちに誘われて初めて見にいったとき、かっこいいなあとと思いました」

自分も舞ってみたい、そう思った康太くん。しかし、参加資格である諏訪神社の氏子ではなかった。

福田十二神楽は、12人の氏子の長男が神楽師となり、子どもから子どもへと代々受け継がれてきた。ただ少子化の影響で、そのときのメンバーは7人。そこで、保存会などが相談して、康太くんを特例で受け入れてくれた。それから「百日道場」と呼ばれる厳しい練習を経て、見事、二十二代神楽師となった康太くん。以来、毎年春と秋の祭りで神楽を披露し、いつしか8人の神楽師の中で最年長となった。

「練習は厳しかったけれど、舞っているときは楽しい。これからは、自分が皆を引っ張っていかなくてはと思っています」

福田十二神楽で神楽を舞えるのはあと2年、高校3年生までだ。そして、その後も後輩の指導にあたらなければならぬ。康太くんは、高校卒業後の人生をどんなふうに思い描いているのだろう。

「卒業したらエネルギー関係の仕事に就きたい。だから、高校では機械科を選びました。できれば新地にある火力発電所に就職したいです」

都会に出てみたい、という思いも少しはある。でも、地元の復興に携わりたい、そして神楽をしっかり伝えなければ、という気持ちがいまの康太くんを支えている。

「福島にいると、いやでも日々、原発のニュースが目に入ります。放射線は目に見えないし臭わないけれど、原発事故で逃げたときの怖さはいまも覚えています。そんな経験からも、原発に頼らないエネルギーを、という気持ちがあるのでは」と友恵さんはいいます。

感謝の気持ちをつないでいく

一家がいま暮らしている仮設住宅は4畳半2間。身長181cmとなった康太くんと両親の3人で暮らすには、決して十分な広さとはいえない。それでも、住めば都だったと友恵さんはいう。

「康太が反抗期のときでも、部屋が狭いから何も隠しようがない(笑)。その距離感が、家族にとってよかったのかもしれません。もちろん、隣近所の騒音とか小さなトラブルはありましたが、皆で声をかけ合ってなんとかやってこられました」

ただ、仮設に住めるのは今年度限り。今後は住まいの自立再建を目指していかなければならない。そんな中、就学支援奨学金は、高校進学の際の制服や体操服、学用品の購入費などに役立てられたという。

「奨学金をはじめ、これまでにたくさんの方から力をお借りしました」と友恵さん。

「皆さんには感謝の気持ちしかありません。康太には、その気持ちを次につなげられる大人になってほしいです」

康太くんはいま、神楽の継承を胸に、将来への夢を描いて充実した日々をおくる。「故郷はどこ?」との問いに、「自分の故郷は新地です」と迷いなく答えてくれた。



中学3年の秋祭りで「二本剣(ほんつるぎ)」を舞う康太くん

※奨学生の名前は仮名です。学年は取材当時のものです。

山本康太くん
福島県新地町 高校1年生

わかるのかなあ、皆優しいなあ、と思って感動しました」
5年前の震災で、里佳子さんの家は半壊したものの、いまは修理して住んでいる。ただ、直後の原発事故で一時は栃木県に避難を余儀なくされた。母の佐知江さんの仕事が再開するのに合わせて、いわきに戻ってきたが、見えない放射線はもちろん、立て続け余震が怖かったのを覚えている。そんな思いも、熊本地震被災者への共感につながっているのだろう。

里佳子さんの生徒会の任期はあと半年。これからも、学校内外で幅広い活動をしていきたいと話してくれた。

楽器を修理する仕事がしたい

里佳子さんが通っている高校は私立なので、入学当時は家の経済を心配していたようだと、母の佐知江さんはいう。

「でも、就学支援奨学金が支給されることになって、少し安心したようです。それからは、毎日とても楽しそうに学校に通っています」

姉は東京の専門学校に通っているため、里佳子さんは佐知江さんとふたり暮らし。働く母のために、お風呂掃除などの家事も少しづつ手伝うようになった。

そして、高校2年生となつたいま、将来なりたい職業はもう心に決めている。エレクトーンの修理をするリペアマンだ。

「音楽が好きで、小さいころからずっとエレクトーンを習ってきました。演奏も楽しいけれど、私は、楽器を直すことに興味があるんです。以前、自分のエレクトーンをリペアマンの方が修理するのを見て、やってみたいと思ったのがきっかけです」

できれば地元いわきで、エレクトーンを習ってきた楽器店に就職したい。そして、楽器に囲まれながらリペアマンとして仕事をするのが夢だ。



高校になって勉強が難しくなった。「とくに数学と英語が苦手です…」

夢はエレクトーンのリペアマン

※選学生の名前は仮名です。学年は取材当時のものです。

沢田里佳子さん 福島県いわき市 高校2年生

好きな授業は音楽と体育という沢田里佳子さん。中学のときから部活は吹奏楽部で、1年のときは打楽器、2年からはトロンボーンを吹いている。高校に入ってもやはり担当はトロンボーンだが、トランペットとかけもちすることもあったとか。いずれも音感とリズム感、そして体力のいる楽器だ。

「トロンボーンは、メロディを吹くときは楽しいけれど、裏打ちのリズムで吹くことがよくあって、それが難しいです。でも、部活は生徒も先生も和気あいあいとして、すごく仲よし。だから練習はいつも楽しいです。地区や県の音楽祭を目指して練習を重ねていますが、去年の夏のコンクールでは、いわき市で金賞を受賞しました」

今年も、夏のコンクールに向かって練習に励んでいる。

熊本支援で知った人の優しさ

吹奏楽部と同様に、里佳子さんが高校で頑張っていることがある。1年生の冬、自ら立候補し、当選して始まった生徒会活動だ。

「私の高校は、体育祭などの行事にひとり一人が真剣に取り組むことで、学校全体が盛り上がるという、とてもいい学校です。その裏方をやっているのが生徒会。だから私も、文化祭や体育祭のお手伝いができたらいいな、と思ったんです」

ほかにも、卒業式や入学式、クラス対抗の球技大会など、生徒会が企画して準備することはいろいろある。その活動の中で、今年は、熊本で発生した地震被災者のための街頭募金を行ったという。

「東日本大震災では、奨学金や支援物資などで、たくさんの方に助けていただきました。だから、今度は私たちが、熊本の人たちのために少しでもお役に立てれば、という気持ちで街頭に立ちました」

ショッピングモールの前で募金を呼びかけると、たくさん的人が立ち止まってくれたそうだ。募金だけでなく、「頑張ってね」と声をかける人や、差し入れを持ってきてくれる人までいたとか。

「福島の人たちも被災しているから、被災者の気持ちが



トロンボーンは中学生のころから。「皆と演奏するのが楽しい」

子どもたちはいま

Case
3

スポーツで夢のステージに行く

※被災者の名前は仮名です。学年は取材当時のものです。



好きな科目は体育と実習。「いい先生方に恵まれていると思います」

山 本徹くんは、震災以来、仮設住宅で暮らしながら、実業系の高校の機械科に通っている。授業では、自分の手でものをつくる実習がとても楽しいという。

「例えば、^{いこ}鑄込みをやったり、真鍮を削って文鎮をつくったりします。文鎮は、長い棒を切ってから形をつくつていきます。7cmくらいの文鎮がひとつ出来上がるのに、計21時間、7週間もかかるんですよ」

震災前まで、父の明さんは工場を営んでおり、徹くんも、小さいころから機械や重機を間近に見て育った。だから、いまの高校を選んだのは自然だし、学んでいることがいつか仕事に生かせればと考えている。また、重機の操縦にも憧れがあり、いつか重機の免許を取りたいといふ。

ただ、徹くんが本当にやりたいことは、別にある。

スポーツに関わって生きていきたい

「小さいころから走るのが好きで、かけっこはいつも1番。自分でもどうして速いのかわかりません(笑)。中学には陸上部がなくて、サッカーをやっていたのですが、高校に入ったら絶対、陸上がやりたかった。いまは念願の陸上部で100mと200mを走っています」

練習は、毎日の放課後と土曜日の午前中。テスト期間以外はほとんど陸上漬けの毎日だが、徹くんは楽しくて仕方がないといふ。

「春から夏にかけては大会がいくつもあるから、タイムを伸ばす目標がいっぱいできて、わくわくします。走ることだけでなく、スポーツは何でも大好き。だから、将来、何らかの形でスポーツに関わって生きていきたいです」

いまの目標は、インターハイ出場。さらに、全日本ユースという大きな大会も控えている。その先は、できれば大学に進学して陸上を続けたい。そして、スポーツインストラクターの仕事をやってみたい。それが、徹くんの本当の夢だ。

ただ、徹くんの家族は、震災5年目にしてようやく高台の移転先が決まったばかりだ。これから家を新築

するための費用が必要になってくる。それは、被災した一家にとって並大抵の負担ではないはずだ。

「でも、まだ諦めてはいません。部活でいい成績が出せれば、学費が免除されるかもしれないし、道はいろいろあると思うので、夢のステージに行けるよう頑張ります!」

大好きな地元を自分の手で復興したい

海の近くにあった自宅も、明さんの工場も、津波ですべて流されてしまった。けれども、徹くんは生まれ育ったこの土地が大好きだといふ。

「どんな仕事に就くにしても、できれば地元で就職したい。ここは山があって川があって、目の前に海がある。静かだし、鹿とかタヌキとか動物もたまに見かけます。そんな自然豊かな地元を、自分の手でなんとか復興したい。そして、大船渡だけでなく、岩手県全体がスポーツで元気になったらいいと思います。そのときに、僕もスポーツに関わっていられたらいい」

震災後、学校で将来の町をどうするか授業で話し合うたびに、どんな形でもいいから地元の力になりたいと思ってきたそうだ。家や店はぼつぼつ建ってきたし、交通機関も整ってはきたけれど、大船渡の復興はまだまだこれからだといふ。だからこそ、地元への思いには熱がこもる。

小学5年で被災した徹さんにとって、震災はまだ心の隅にしっかりと残っている。皆で山に避難したときの風景も、支給品が届かなくて食事に困ったことも、はっきりと覚えている。とくに忘れられないのは、地元の消防団の人たちが、一生懸命、自分たちの世話をしてくれたことだ。

「地元で就職したら、ぼくもぜひ消防団に入って、今度は自分が人を助けられるようになります」



「大船渡が好き。地元の復興に役立ちたいです」

Case
4

子どものころからの夢に向かって

※学年は取材当時のものです。

大友琉聖くん 福島県いわき市 高等専門学校2年生



「学校では、『こんな実験がしたい』といえば先生たちも協力してくれるし、すごく充実しています」

「薬」の開発をする研究者になりたい

大友琉聖くんが描く将来の夢だ。その夢に向かって、いまは物質工学科で生物学を学んでいる。幼いころ父を病氣で亡くした経験が原点となった。

父の孝さんが体調を崩したのは、琉聖くんが5歳のとき。誤診により誤った薬を処方されたため、一時は命の危険にさらされた。その際に悪性リンパ腫と判明し、適正な治療が始まったものの、4年の闘病を経て亡くなっただといふ。琉聖くんは小学3年生になっていた。

「父のことが心残りで…。それで、自分の力で薬を開発したいと思うようになりました。母には苦労をかけたし、ちゃんと社会の役に立てるように頑張っていきたいです」

琉聖くんには2歳下の弟がいる。二人の息子を抱えて、病気の夫の介護をしながら働く母の姿を、琉聖くんはしっかりと心に刻んできた。

原発事故で避難した東京で

東日本大震災が発生したのは、孝さんが亡くなつてわずか2年後のことだった。母の綾子さんは振り返る。「ようやく、気持ちも生活も立ち直りかけていたのに…。地震だけでなく、原発が爆発したので、とにかく子どもたちが心配でした」

福島第一原子力発電所の事故後すぐに、琉聖くんは弟と二人だけで東京の知り合いの家に避難。2ヵ月間だったが、東京の学校で学んだ。

「別の場所に避難した友だちからは、『放射能がうつる』といじめられたと聞いていたので、最初は心配でした。でも、僕が通った学校は皆親切で、友だちもいっぱいできました。いまでも手紙や電話でつながっています」

おじいちゃんのお米

東京では、滞在先の家族も親切にしてくれ、恵まれた環境で避難生活をおくった琉聖くん。そんな中、ひとつだけ心に引っかかることがあった。

「お米の味が、家で食べているものと全然違ったんです」家では、幼いころからずっと祖父がつくった米を食べていた。よその米を食べて初めて、琉聖くんは、祖父の米がどれだけおいしいか知ったといふ。

「当たり前だと思っていることは、決して当たり前ではないんだ。大切にしていることは、決して当たり前ではないんだ。それを、父の死と震災と、その後の原発事故で知りました」

原発事故後の風評被害によって、祖父の米は以前より売れなくなってしまった。それでも、土を入れ替え、農協で放射線検査を受けながら、いまも誇りを持って米づくりを続けているといふ。

「風評被害はどうしようもないです。だけど、『おいしいといってくれる人がいる限り、おれは米をつくり続ける』というおじいちゃんは、すごくかっこよくて、尊敬しています」綾子さんも、福島への思いは深い。

「福島はすごくいいところで、農家の方々もおいしいものをいっぱいつくっています。今後は琉聖たちが復興への架け橋となって、『僕は福島の出身です』と堂々といえる世の中になってほしいです」

いまはロボットに夢中

苦しい家計をやりくりして琉聖くんを高専に通わせているのは、「財産は残せないけれど、教育は残る」という綾子さんの思いからだ。夢に向かって、常に新しいことに挑戦したいという琉聖くん。授業のほかにも、いま夢中になっていることがある。部活のロボット研究会だ。琉聖くんが通う高専は、なんと3年連続で高専ロボコン(「アイデア対決・全国高等専門学校ロボットコンテスト」の略)の全国大会に出場している強豪校なのだ。

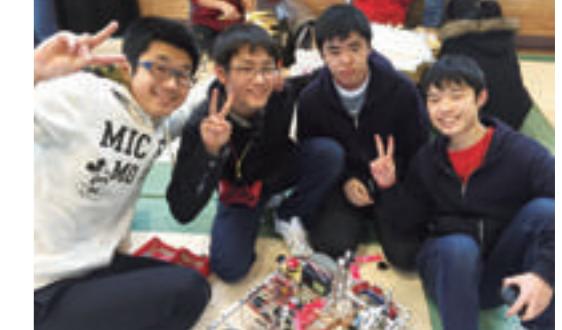
「僕は電気班にいて、ロボットを動かす回路をつくり

ています。一個一個の部品について学び、動く仕組みを理解してロボットをつくり、それが自分の操縦で動くのがすごく楽しいです」

ロボットを動かす技術や仕組みは、生物の実験作業

にも役立てたいといふ。いまは秋の大会に向けて、皆で

アイデアを出し合っているところ。目指すのは、「もちろん優勝です!」と目を輝かせた。



ロボット研究会の仲間たち(左から2人目が琉聖くん)

※文中の保護者の名前は仮名です。

子どもたちはいま

Case
5

そろばんで10段をとりたい



趣味はそろばんと読書。
「ミステリーとか友情ものとか、いろんなジャンルを読んでいます」

長 沢ほのかさんは、5人姉弟のいちばん上。下の弟ふたりは震災後に生まれたので、いま3歳と1歳。まだまだ手のかかる年ごろだ。だから、仕事で忙しい母の望美さんを助けて、家ではほのかさんが「小さいママ」として頑張っているという。

放課後のほのかさんの行動は、だいたいこんな感じだ。

「7時まで部活でテニスの練習をして、それから9時までそろばん教室。家に帰ってからは、洗濯物をたたんだり、お風呂を洗ったりして、小さい弟たちをお風呂に入れます。私が勉強を始めるのは、ご飯を食べて、お風呂に入ってからです」

慌ただしい毎日だが、どれも大切なことばかり。中学から続けているテニスも楽しくて、土日の練習も苦にならないという。それに、ほのかさんにとって、いちばん大事なのは家族なのだ。

「母は保険の外交をやっているので、震災後はとくに仕事が忙しくなりました。毎日、結構疲れていると思うから、手伝いをするのはいやではないです。後から母がほめてくれるのが嬉しいし(笑)。」

ライフワークはそろばん

震災以来暮らしている仮設住宅は、下の弟たちが生まれてからなおさら賑やかになり、狭さも気にならない。寝るときには、親子仲よくずらりと並んで寝るそうだ。

「家族っていいなと思う。たまに、そろばん教室でひとりになることがあるけれど、そんなときは、早く賑やかな家に帰りたいなと思います」

そろばんは小学1年生のときに始めて、なんと珠算と暗算では9段の腕前だという。中学に入り、勉強や部活との両立が難しくなったときは、やめたいと思うこともあったとか。それでも粘り強く続けてきて、中学3年のときには、読み上げ算の部で日本一となった。成績がよいでいろいろな大会への遠征も多く、ほのかさんにとって、そろばんはいま大事なライフワークとなっている。

「いちばんの目標は、珠算と暗算で最高段位の10段を

とること。検定前には、毎日のように教室に通っています。10段を持っている人は、東北にも数えるほどしかいませんが、高校を卒業するまでにとれるよう頑張ります」

母の笑顔に支えられて

そろばんの成果もあって、得意な学科も好きな学科も数学だ。それを生かして、大学に入って経済学を勉強し、金融関係の仕事に就きたいという夢を持っている。そろばん教室の先輩が銀行に就職したので、刺激を受けた部分もあるそうだ。そんなほのかさんを、いつもものびのびと応援してきたのが望美さんだ。

「うちは子どもがいっぱいいるので、決して楽な暮らしではないけれど、本人が希望するなら大学にも行かせてあげたい。『大学に行っていいの?』と遠慮していた時期もありましたが、気にしなくていいといいました。奨学金は、高校進学の時の費用や、学費にも使わせていただき、おかげさまで本当に助かっています」

ほのかさんは、家族を明るく照らしてくれる望美さんの笑顔が大好き。

「そろばんとか、勉強とか、将来のことを考えて頑張るから、母にはずっと支えていてほしい」とはにかんだ。「震災後の5年間で、ほのかは友だち思いになったし、自分よりも相手のことを優先して考えるようになりました」と望美さん。幼い弟たちの面倒を見ながら、部活やそろばん、受験勉強を頑張る日々。そんな中、学校でいちばん楽しい時間は、お昼に望美さんお手製の弁当を食べるときだそうだ。

「ご飯に海苔で顔を描いたりして、母が毎朝、可愛い“キャラ弁”をつくれるんです。それを友だちと一緒に食べるときが、いちばん楽しいです」



いま使っているそろばんは母のお下がり。「大事に使っています」

※受賞者の名前は仮名です。学年は取材当時のものです。

長沢ほのかさん 岩手県大船渡市 高校1年生

Case
6

機械と柔道の2本柱でいきます！

長友明宏くん 福島県いわき市 高校1年生

※受賞者の名前は仮名です。学年は取材当時のものです。



「ばくの地元はいまも浪江。浪江で生まれたことに誇りを持っています」

自 動車、中でも「国産の乗用車が大好き」という長友明宏くん。自動車の部品やエンジンをつくる仕事に就きたいと、工業高校の機械科で学んでいる。「とにかく、ものつくることが好きで、授業では実習がいちばん面白いです。エンジンを分解して、それを組み立て直すという授業がこれからあるのですが、いまから楽しみです」と目を輝かせる。苦手なのは数学だが、自動車関係の仕事に必要なので、懸命に勉強しているそうだ。

いまははつらつと学校生活をおくる明宏くんだが、震災後は生活が落ち着かず、辛い思いに沈むこともあった。

浪江から二本松、そしていわきへ

明宏くんが生まれ育ったのは、福島第一原子力発電所に近い福島県浪江町。父の忠勝さんは、震災直後の緊迫した状況を振り返った。

「12日に『原発が爆発しそうだ』といわれ、ありつけの米を炊いておにぎりにして、家族で町内の津島へ逃げたんです。誘導する人たちが皆、防護マスクをつけていたので『おかしいな』と思っていたら、1号機どころか、その後2号機も3号機も爆発してしまった…」

30年近く原発関連の仕事をしてきた忠勝さんには、信じられないことだった。しかし、津島も危ないといわれ、3月15日には二本松市へ。借り上げ住宅が見つかるまで、体育館で1ヵ月近くを過ごした。4月から小学5年生となった明宏くんは、体育館から二本松市の小学校へ通うこととなった。

「それでも、学校に行けるのが嬉しかったのでしょう。息子はニコニコしていました」と忠勝さん。

事故後、原発から仕事の要請はなくなり、忠勝さんはいわきに通って細々と日当の仕事をしていた。自宅は放射線に汚染されていて、もう帰れない。いわきへの移住を決めたとき、明宏くんは6年生になっていた。

心の支えになった柔道

「仲よしだった浪江の友だちはばらばらになり、二本松でやっと友だちができたのに、また転校!? という感じで、もう気持ちがついていけませんでした」と明宏くん。

しばらくして、転校先の学校の先生から忠勝さんのも

とに電話が入った。授業中、明宏くんがぼんやり空ばかり眺めているというのだ。そこで、忠勝さんは、明宏くんを車に乗せて二本松まで連れて行った。

「息子は車の中でぼろぼろ泣いていました。それで、『お前はもう6年生になったんだから、一人で電車にもバスにも乗れるだろう? いわきから二本松はこんなに近いんだよ。来たくなったらいつでも二本松に来い』といつたら、やっと納得してくれました」

その後、二本松の友だちと行き来しながら、いわきでも少しずつ友だちができていった明宏くん。その心の支えとなったのが、柔道だった。小学2年で始めた柔道は初段、黒帯を締めるようになった。震災で一時、中断していたものの、中学校の部活で再び始めることにしたのだ。

「柔道で体を動かすと、寂しいときも元気が出ました。高校に入としても、やっぱり柔道は続けています」

これからも、大好きな機械の勉強と柔道の2本柱でやっていきたい、と話してくれた。

父の代わりに夢をつかむ

いわきで知人に紹介され、コンビニを始めた忠勝さん夫婦。だが、商売の経験がないため、利益を出すのは容易ではないそうだ。

「生活が安定せず、息子たちには辛い思いをさせていますが、60を過ぎた体にはきつくて…。コンビニをやめて、除染の仕事に行こうとも考えますが、将来が見えないのがいちばん辛い。こんな状態なので、奨学金はありがたくて本当に助かっています。学生服や柔道着もすべて奨学金で揃えてあげることができました」

そんな父への思いを、明宏くんはこう語ってくれた。
「おやじも年なので、無理だけはしてほしくない。だから、自分が頑張って夢をつかもうと思っています」



辛いときも柔道に支えられた。
高校になって新調した柔道着に黒帯を締めた

被災地から 「ありがとう!」



Letters from TOHOKU

奨学生から、ありがとう

当たり前の日常はなくしたけれど…

東日本大震災当時、小学4年生の私にとって、毎日同じ学校へ通い、同じ友だちとずっと一緒に過ごせることが当たり前のことでした。その日常生活が急になくなりました。最初は家に帰れない不安や慣れない土地での生活に日々つらく悲しい思いをしました。

しかし、家族や学校の先生、友達が私を心配し、声をかけてくれたお陰で不安や悩みが解消されていきました。また、日本や世界の皆さんからのたくさんの支援により、私は少しずつ元気になってきました。

おにぎり1個、えんぴつ1本、ノート1冊、再び手にしたときの嬉しさと感謝の気持ちを忘れません。もうすぐ震災から5年、私は中学3年生になりました。皆さんの支援のお陰で、毎日楽しく転校先の学校に通うことができています。新しい友だちもたくさんできました。

「本当にありがとうございます。」

この度は、奨学生決定通知ありがとうございます。
私は、東日本大震災のとき、小学4年生でした。両親が出かけていていなかったので、近所の方々に導かれ、小学校に避難しました。両親とは、夜8時過ぎにやっと会えたのもつかの間、すぐ、原発事故のため、双葉町の人全員避難しました。避難所では、老若男女がひしめき、途方に暮れた姿が強く印象に残っています。小学生ながら、私はそのときの役場の方々や地域の方々のテキパキとした行動に感動しました。同時に、緊急時に人のために行動できる人間になりたいと強く思うようになりました。
現在もなお避難を強いられた中で、中学3年という節目に立ちました。
志高く目標に向かって努力できる人間を目指し、目の前の高校受験をがんばりたいと思います。

避難生活も今年で5年目を迎えました。
東日本大震災当時、私は小学4年生でした。運動着と上はぎで、避難先を転々としたことが昨日のことのようです。今でも信じられません。
そして、その日から今日まで、たくさんの人びとにお世話になりました。そのおかげで、落ち着いた生活ができていることに感謝しています。
私はいま、高校受験に向けて勉強に励んでいます。今回、このような奨学生を支援していただき、本当にありがとうございました。この奨学生で、自分が志望する高校に進学して、「教師になる」という夢に向かって頑張りたいと思います。



3年間の奨学生受給を終えて

これからも感謝の気持ちを胸に

今までの3年間、ご支援いただき本当にありがとうございました。
見慣れた風景が大津波によって壊された瞬間は、いまでも鮮明に思い出せます。あのときの悲しさは一生忘れる事はないでしょう。しかし、募金者の方々をはじめ、周りの方々の支援のおかげで励まされ、元気に学校に通い、勉強や部活動に励むことができました。
大震災から5年がたち、復興も進んできました。しかし、震災前の風景からはまだほど遠いものがあります。募金者の方々への感謝の気持ちを胸に、自分ができることをしていきたいと思います。このご恩は一生忘れません。本当にありがとうございました。



今まで奨学生を給付していただき、ありがとうございます。そのおかげで、充実した高校生活を送っています。大震災から5年たったいまでも、まだまだ復興には時間がかかりそうですが、いつか私も山田町の力になりたいと思います。私は復興したときの山田町を見るのが楽しみです。3年間奨学生を給付していただき、本当にありがとうございました。

保護者より

「一人ではないんだ」と心まで支えられた

平成25年から3年間、全国の皆さまの支援のお陰で、震災当時小学6年生だった息子は高校3年生となりました。

小学校の卒業式を図書室で行い、中学校の入学式を1ヵ月遅れて行い、校庭には自衛隊の皆さん方がテントを張り、必死に働いている姿を見て、感謝しながら通学していたことを思い出し、胸が熱くなります。

自宅が全壊し、学校を転校することも考えたとき、涙を流してうなづく子どもの姿が忘れられません。

転校せずにすみ、苦しいこと、悲しいこと、楽しいこと、たくさんの思い出がある仲間たちとともに卒業できたこと、親として何よりの幸せ、喜びでした。

2011年3月11日の東日本大震災で家は全壊し、自家用車と娘が卒業式で着る制服は津波で流されてしまい、卒業式では72人の中一人だけジャージ姿で出席しました。

奨学生は高校の費用(入学金、制服、授業料、修学旅行、通学費)に使わせていただきました。3年間ご支援いただき助かりました。

東日本大震災では何もかも無くなり、心に大きなショックを受けました。そんな中、娘が奨学生を受けることになり、一人ではなく、いろいろな人に支えられているんだと、子どもにとっても、家族にとっても、とても励まされ、奨学生だけでなく、心の支援までしていただいたと思います。

おかげさまで、いまでは娘も楽しく学校に通っております。これも支援があったからだと思います。本当にありがとうございました。

継

統的な支援に 子どもたちの未来への 想いを込めて

東日本大震災から5年半。

「ユネスコ協会就学支援奨学金」への支援を通して、
いまなお東北の子どもたちへの応援を続ける企業の皆さん。
さまざまな取り組みと、支援に込めた思いを紹介します。

酒蔵からできること

旭酒造株式会社

だっさい
「獺祭 純米大吟醸磨き二割三分」の売り上げの中から、1本につき1.8ℓ/100円、720ml/50円、300ml/20円、180ml/15円を寄附。企業の生業をもって社会に貢献する取り組みです。

取り組みに込めた思い

私たちの中にあるのは、「酒蔵は社会とともにある。できるときは常に何かの形で社会にお返しすべき」ということです。大震災で被害を受けた子どもたちは、これから長い人生を地域社会やご親族の限られた支援のもとに生きていかなければならない。そんな子どもたちを「社会が助けなければ誰が助けるのか」と思いました。そして「社会とは誰なのか」「それは私たちでしょう」と。おかげさまで売り上げ減にあえぐ酒蔵を継いだ30年前の、わが子の寝顔を見ながら「この子が大人になるまでこの酒蔵は持つんだろうか」と心配する立場から、何とか健全経営に近づいた旭酒造は、ここまで育てていただいた社会に対し、「永続的に何かをさせていただかなければ」との思いで、この支援を立ち上げました。これは旭酒造の経営が健全な間は永続させるつもりです。
(代表取締役社長 桜井博志)



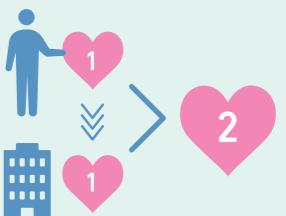
9400名の社員の想いを託して

NTTドコモグループ

ドコモグループ社員有志約9400名が年間を通じて社員募金に取り組み、さらに、全国各地にあるグループ各社が被災地への想いを胸に、社員の寄附に対して同額を会社も寄附する「マッチングギフト」制度を実施。グループ会社全体で取り組んでいます。

取り組みに込めた思い

ドコモグループでは震災翌年の2012年度から社員有志による東北応援社員募金に取り組み、会社側もマッチングという形で社員と同額を寄附し、被災された皆さまの生活支援に取り組むNPO団体等の支援を中間支援団体を通じて行ってまいりました。震災に対する「記憶」や「認識」を風化させないため、給与控除という形で募金を募ってはおりますが、開始以降、毎年1万名近くのグループ社員の賛同をいただき、2015年度も約9400名の社員から東北被災地への「復興の想い」をお預かりしております。東北被災地のさらなる「復興」、そして東北の未来を担う子どもたちへの応援を今後も継続していきたいと思います。



Web約款と役職員募金を通じて

あいおいニッセイ同和損害保険株式会社

パソコンなどからいつでも「ご契約のしおり(普通保険約款・特約)が閲覧できる「Web約款」。このWeb約款に賛同して選択されたお客様の数に応じて、会社が寄附金を拠出。紙資源やエネルギー資源などの削減につながり、環境保護や被災した子どもたちへの寄附など「社会にやさしい」活動を続けています。また、この他にも、役職員による募金制度「MS&ADゆにぞんスマイルクラブ」を運営し、その中から被災した子どもたちへの支援を行っています。このクラブは、役職員一人ひとりの社会貢献活動を支援し、広く社会に貢献するあいおいニッセイ同和損保グループを実現することを目指し、2001年4月1日に設立した募金制度です。2016年8月現在1万3000人を超える参加者がいます。

取り組みに込めた思い

当社は、東日本大震災発生時より被災地域の子どもたちの教育環境復旧のため、さまざまな支援を行ってきました。震災の影響で就学への支援を必要とする子どもたちに継続した支援を行うことで、子どもたちが安心して学べる環境をつくり、将来の夢に向かって取り組むことができるよう努め、この支援活動を行っております。



1件2ユーロ寄付キャンペーン

アクサ生命保険株式会社

契約1件につき2ユーロ相当額を積算した金額を同社が拠出し、被災地支援を行う団体や組織に寄附する「復興支援 1件2ユーロ寄付キャンペーン」。営業活動を通じて被災地域を支援したい、という社員らの声によって実現したそうです。本キャンペーンを通じて、被災地復興への想いを全国のお客さまと共有する取り組みを継続しています。

取り組みに込めた思い

本取り組みを通じて、「被災した子どもたちの就学」と「学校の減災教育強化」を支援しています。震災を風化させないために、また自然災害がいつどこで発生するかわからない昨今、一人でも多くの子どもたちの命が救われることにつながることを願い、アクサ生命は本取り組みを継続しています。



特別チャリティ企画を通じて

グッチ ジャパン

小學館発行の雑誌とのチャリティ企画に協力し、就学支援しました。企画は1冊200万円の雑誌『ミリオンプレシャス』を発売するというもので、購入すると、人気スタイリストのアドバイスのもとでグッチのハンドバッグがオーダーできるというもの。さらに、男性向けに1冊100万円の『ミリオンメンズプレシャス』も発売され、こちらはグッチの貸し切りの店内で、同社の最高級ラインのフルコーディネートがオーダーできるというもの。雑誌の売り上げ全額が寄附されるとともに、企画費用をグッチが全て提供しました。

取り組みに込めた思い

グッチは、2005年よりグローバル規模で、世界で弱い立場におかれた子どもたちの教育を支援する社会貢献活動を積極的に行ってています。日本では、2012年より「ユネスコ協会就学支援奨学金-GUCCI奨学生」として、東日本大震災で被災した中学3年生に対し3年間の就学支援を行っており、2015年までに96名の支援を完了し、現在も35名に対し支援を続けています。



全国2400店の代理店と連携

ソニー生命保険株式会社

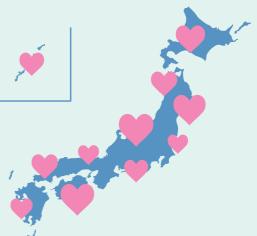
保険募集代理店約2400店の年度業績に応じて、会社が一定金額を拠出して寄附。北海道から沖縄まで全国の代理店と連携した取り組みを行っています。

取り組みに込めた思い

弊社では、保険代理店のことを、パートナーであることはもとより、お客様の生涯のパートナーであることから「パートナー」とお呼びしています。

現在、全国各地でたくさんのパートナーが生命保険のプロフェッショナルとして、高度な専門知識とコンサルティングに基づくニードセールスを実施し、「お客様のパートナー」として活躍しています。

お客様の一生涯をお守りすることをビジョンに掲げ、私たちはパートナーの皆さまとともに日々歩んでおります。そして今回、多くの子どもたちの大好きな未来や夢を守っていくという想いを形にするために、業績に応じて一部をユネスコ協会就学支援奨学金に寄附させていただきました。



MUFG・ユネスコ協会 東日本大震災復興育英基金

子どもたちの笑顔のために、高校卒業時まで物心両面での支援を継続

概要

三菱東京UFJ銀行はじめ三菱UFJフィナンシャル・グループ(MUFG)と協働して標記基金を創設しました。
対象者：東日本大震災発生時に災害救助適用地域に居住しており、両親もしくはいずれかの保護者が死亡・行方不明となった子どもで、小学校から高等学校に在籍していた児童生徒です。
 (2012年～2014年の4月に小学校に入学した児童も対象)

支援金額と期限：奨学生一人当たり一時金10万円＋月額2万円を高校卒業まで給付します。

2015年度の支援

2015年度はこれまで受給した奨学生への継続給付を行い、
 106名の奨学生が高校を無事卒業し、奨学金の給付を終えました。
 (新規奨学生の募集は2014年度の小学1年生の募集をもって終了しました)
受給者数：926名(2016年3月31日現在)
 2011～2015年度までの累計受給者数：1483名

奨学生から、ありがとう！

学校がおわって家に帰ってきて、
 自転車にのろねんしゅうをがんばったら、
 のれるようになりました。
 今は学校から帰ってきて、
 ばあちゃんのお手つだいをしています。
 お休みの日は、
 犬のチップのさんぽをしています。



(小学3年生／女子)

震災から5年が経ちました。
 いつもご支援をありがとうございます。
 おかげさまで第一志望校に
 入学することができました。
 高校では勉強と部活の両立、
 パソコンや簿記などの資格を取得して
 将来に役立てたいと思います。
 高校卒業後は大学にも進学したいので、
 基金はそのために貯金しています。
 今後ともご支援をよろしくお願ひします。

(高校1年生／男子)

ぼくは学校が終わると毎日ゆめハウスに行っています。ゆめハウスは、東日本大震災のあと、ぼくの住む仮設の近くにできました。全国のぼきんを集めて、そのお金でうんえいされています。そこではたらいているお兄さんは、しんさいご、くまもとから来て、いままでずっとぼくたちとあそんだり、サッカーをおしえてくれたり、家族のようにすごしてくれました。今は、くまもとがしんさいで、そのお兄さんはくまもとにもどりました。今は何もできないけれど、ぼくがおとなにならたら、そのお兄さんのような人になりたいです。そして、お兄さんとすごした毎日をわすれずに、おんがえしをしたいです。お兄さんの住むくまもとへぼきんをするために、ゆめハウスでは、ぼくたちのつくったカップや手づくりクリッキーをバザーに出す予定です。ゆめハウスのみんながかいた手紙もとどける予定です。ぼくたちにいつもえがおで元気をくれたお兄さんに、早く元気になってほしいです。

(小学4年生／男子)

保護者からのお便り

震災から5年1ヶ月。いまだに夫とは会えず、娘もきちんとお別れもできず、ただ毎日を前進していく日々を送っています。

震災前と変わらず生活でき、子育てができることに感謝の気持ちでいっぱいです。

夫がない生活を当たり前と思えず、心の時間は止まったままでですが、娘は未来のために前に出していかなければなりません。5年が経とうというのに頼りない親ですが、娘の未来を、葉っぱだけ伸びるのではなく、花が咲いて皆さまに見てもらえるよう、がんばって育てていきます。これからもよろしくお願いします。

奨学生たちのいま



「全日本少年サッカー大会岩手県予選で準優勝しました。
 悔しかったけれど、これからもサッカーを頑張ります」



「全国のボランティアの方々と一緒に、地元、南三陸町にある海水浴場の清掃を行いました。皆さまのおかげで、夏は活気あふれる場所となりました！」

担当者からのメッセージ

「MUFG・ユネスコ協会 東日本大震災復興育英基金」が創設されてから5年半が過ぎました。奨学生や保護者の方たちから届くお手紙、また卒業生から届く感謝の言葉などを読むたびに温かい気持ちになります。これからも奨学生が夢を持ち続けながら学校生活を送れるよう、陰ながら応援していきたいと思っております。

子どもたちとのふれあい支援

三菱UFJニコス株式会社をはじめ、三菱UFJフィナンシャル・グループ各社の社員ボランティアが小学校を訪問し、花壇づくりなど、子どもたちと触れ合う活動を実施しました。また、日本フィルハーモニー交響楽団と連携した被災地でのコンサートも実施しました。

第2回

アクサ ユネスコ協会

減災教育 プログラム

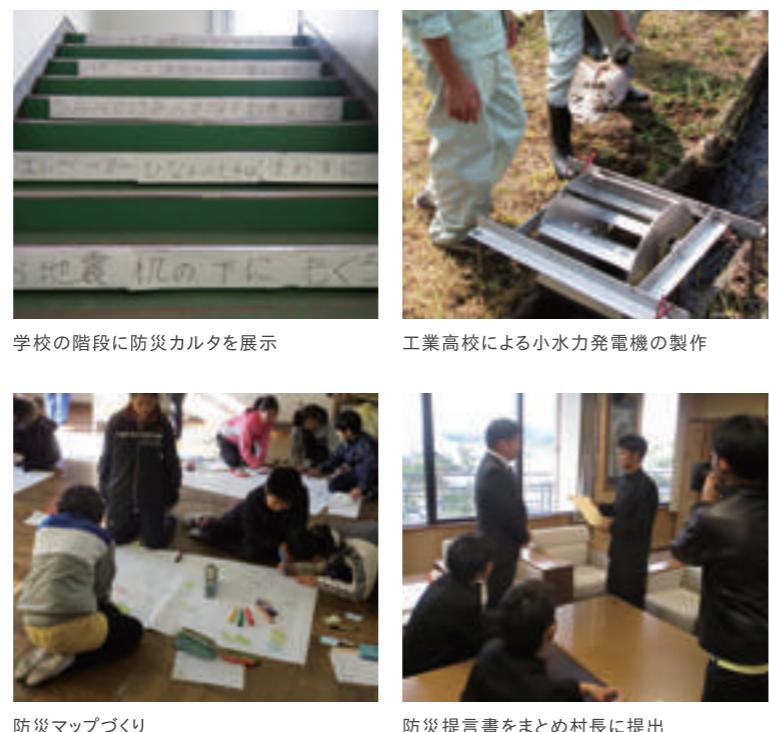
協力:アクサ生命保険株式会社
プログラムコーディネーター:及川幸彦氏(東京大学 海洋アライアンス 海洋教育促進センター 主幹研究員)

減災・防災教育への助成

2015年度は、応募校の中から19都道府県・21校を選抜し、助成金を支援しました。
各学校の活動には、児童・生徒3958名、保護者や地域の方々など3472人、計7430が参加しました。
各地で地域の特色に合った多様な活動が展開されました。

都道府県	学 校 名
北海道	北海道教育大学附属札幌小学校
福島県	只見町立朝日小学校
新潟県	新潟県立柏崎工業高等学校
茨城県	つくば市立吾妻中学校
千葉県	市川市立行徳小学校
愛知県	岡崎市立常磐東小学校
愛知県	豊田市立藤岡南中学校
愛知県	名古屋国際中学校・高等学校
三重県	鳥羽市立安楽島小学校
滋賀県	彦根市立城陽小学校
大阪府	箕面こどもの森学園
兵庫県	神戸大学附属中等教育学校
奈良県	奈良県立法隆寺国際高等学校
和歌山県	印南町立印南中学校
広島県	広島大学附属福山中・高等学校
岡山県	岡山県立岡山南支援学校
徳島県	阿南市立桑野小学校
高知県	高知県立須崎高等学校
福岡県	大牟田市立みなと小学校
宮崎県	綾町立綾中学校
沖縄県	沖縄県立宜野座高等学校

助成校のさまざまな取り組み



東日本大震災の記憶と経験を、全国の学校防災につなげる

アクサ生命保険(株)の協力を得て、東日本大震災の経験や教訓を全国の学校防災につなげていくために2014年度から実施している本事業。日本各地で今後起り得るさまざまな自然災害に備えるための減災・防災教育に取り組む、全国の小・中・高校をサポートするものです。
助成金、教員研修、活動報告の3つがセットになったプログラムです。

助成金

教員研修会

活動報告会

教員研修会 in 気仙沼

教員研修では、北海道から沖縄まで19都道府県21校の助成校から35名の先生が、宮城県気仙沼市を訪問しました。
大震災の経験を踏まえて先進的な防災教育を行っている気仙沼市で、この機会でしか学べない被災地の経験や教育実践について、同市の教育関係者などから直接学びました。

2015年9月13日(日)、14日(月)、15日(火)(宮城県気仙沼市、岩手県一関市)

研修協力:気仙沼市教育委員会／宮城教育大学 国際理解教育研究センター／気仙沼市立階上小学校／気仙沼市立階上中学校
講 師:及川幸彦氏(宮城教育大学 国際理解教育研究センター 協力研究員)／塩野孝一氏(京都大学大学院地球環境学堂 特定研究員)
上田和孝氏(特活SEEDS Asia 副事務局長)

現地講師:白幡勝美氏(気仙沼市教育委員会 教育長)／小野美由起氏(気仙沼市立新城小学校 教諭)／片山祥子氏(気仙沼市立松岩小学校 教諭)
被災地区ガイド:辻隆一氏(階上観光協会 会長)

*上記のご所属は研修会当時のものです。



減災教育のあり方を学ぶ

1日目は、東日本大震災の際に教頭先生として学校現場で危機管理の対応にあたり、教育行政でも復旧・復興に携わった経験をもつ防災教育研究者の及川幸彦氏より、これからの減災教育のあり方について学びました。さらに、東日本大震災の教訓を活かして、気仙沼市で開発された防災カリキュラムについて、開発に実際に関わった現場の先生からその実践と成果を学びました。

気仙沼市階上地区で教育実践を学ぶ

2日目は、とくに津波被害の大きかった階上地区を訪問。階上小学校では、毎朝10分間の「防災タイム」を設けて防災教育を習慣づけています。そのようすを見学し、また5年生の授業「防災マップをつくろう」なども視察しました。

続いて階上中学校へ。校庭には、いまも仮設住宅が建ち並びます。生徒会の皆さんから、中学生自身が主体的に進めている計画的な防災活動について学びました。

また、校舎の3階まで津波で破壊された旧向洋高校跡にも足を運び、当時の生徒たちがどのように逃げて無事だったのかなどを、地元の方からお聞きしました。

減災教育について多角的に学ぶ

さらに、同市の白幡教育長(当時)より、減災教育に込めた子どもたちへの思いを伺いました。一方、iPadを使って行ったのは、学校防災力の分析。指標に照らして自校の強味や弱味を認識しました。

最終日には、防災における地域や外部団体との連携の重要性についても学びました。まとめのワークショップでは、研修の成果を各地の学校防災に活かすため、熱心なディスカッションが行われました。

活動報告会 in 東京

学校防災の視野を広げ、さらなる改善を目指すことを目的に、活動報告会を実施しました。助成21校から21名の先生が、助成金を活用して各地で取り組んできた多様な防災教育の実践を持ちより、熱心な議論によって成果を共有しました。地域によって想定される災害や地理的背景はさまざまで、多様な実践や授業の工夫、子どもたちの変化・成長について学び合いました。そして、被災地から学んだ“これからの減災教育に重要な視点”を再確認し、各学校に持ち帰り減災・防災力の強化につなげました。

2016年2月24日(水)(東京都港区 アクサ生命本社)

本プログラムを通して、大震災の経験を全国の学校防災につなげる輪が着実に広がっています。

子どもたちから、子どもたちへ

復興支援 東北の物産販売 高校生プロジェクト in 岩見沢

北海道岩見沢市の高校生たちが、2012年から毎年、東北の子どもたちを応援するプロジェクトを続けています。
若い力を集結して支援と発信を行っています。

合言葉は

“東北を忘れない、買って支援、売って支援”

東北の物産品を購入し、その物産品を北海道の地元で販売。売上金を、東北の子どもたちを支援する「ユネスコ協会就学支援奨学金」に寄附して、被災地で学ぶ子どもたちを応援する取り組みです。支援だけでなく、東北のいまを伝える写真展示を行い、復興支援への関心を高める活動も続けています。

みんなで提案、みんなで実行

4回目を迎えた2015年度のプロジェクトには、岩見沢市内の4校から総勢70名の高校生が集結。合同で話し合いを行い、物産購入(総務班)から、商品説明パネルの制作(庶務班)、販売会ポスター、チラシの制作(宣伝班)、展示物の作成と展示会の実施(展示班)まで、すべての作業を高校生が担当します。

活動の資金調達も自分たちの手で

プロジェクトの実施や仕入れには資金が必要。高校生自らが市内の店や施設、町内会、市役所などを回り、一口500円の協賛金を1200口余り集めました。その資金で、今年は桃ゼリーやマグロの角煮など10地域から11種類の物産品を仕入れました。5回のリーダー会議で販売時期や場所、物産品の手配や運搬などの打ち合わせを行い、2015年度は岩見沢市内のほか札幌市でも販売会と展示を実施しました。

震災への記憶が薄れつつある中、高校生たちは、取り組みを通じて復興支援への関心をいま一度高め、継続的な支援の必要性を訴えています。今後も活動は続きます。

市民の方々からは、「大人でもこういう取り組みは難しいのに、高校生でここまでしているのは立派」という声も。



北海道岩見沢市にある4つの高校が合同で行った
北海道岩見沢農業高校ボランティア・ユネスコ部
北海道岩見沢緑陵高校ボランティア部
北海道岩見沢東高校ボランティア部
北海道岩見沢高等養護学校生徒会執行部
(※2016年度より北海道岩見沢西高校生徒会執行部が新規参加)



大盛況の岩見沢では物産品が完売!



被災地の自治体などから提供してもらった写真を展示

音楽を通じて東北への祈りを届ける

UNESCO平和芸術家

ヴァイオリニスト 二村英仁氏からのメッセージ

子どもたちが不自由なく学び、遊べる環境が一日も早く戻つてることを一心に願い、演奏してまいりました。すぐ傍らで除染を行う重機が轟く中、毎日登校する健気な子どもたちの姿に目が潤んだこともあります。年々人びとの支援への関心が薄らいでいることを憂い、いまだに支援を必要とする現地の声を各地に伝えていくため、今後も演奏して廻ります。また、UNESCO平和芸術家として、引き続きUNESCO本部を通じて被災地の現状を世界に知らせる役割も果たしてまいります。



会計報告

東日本大震災子ども支援募金事業 (2015年4月1日～2016年3月31日)

①ユネスコ協会就学支援奨学金

(単位:円)

項目	金額
前期繰越	502,284,502
寄附額	176,406,695
支出額	200,222,853
奨学金	176,820,000
事業経費	23,402,853
次期繰越	478,468,344

※ユネスコ協会就学支援奨学金は、原則として、奨学生1人につき3年間にわたって支援します。

※次期繰越金は、2016年度以降の本奨学金事業に使用されます。

②MUFG・ユネスコ協会 東日本大震災復興育英基金

(単位:円)

項目	金額
前期繰越	1,484,417,505
寄附額	6,001,800
支出額	240,860,000
奨学金	218,760,000
事業経費	22,100,000
次期繰越	1,249,559,305

※MUFG・ユネスコ協会 東日本大震災復興育英基金は2014年度まで新1年生を募集し、奨学生が高校を卒業する2025年度まで継続されます。

※次期繰越金は、2025年度までの奨学金事業に使用されます。

③減災教育・相撲場・交流活動等

(単位:円)

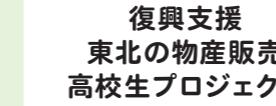
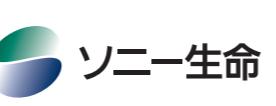
項目	金額
前期繰越	4,295,047
寄附額	18,017,516
支出額	12,462,426
支援物資ほか	2,100,000
事業経費	10,362,426
次期繰越	9,850,137

※相撲場支援等、年度をまたいで支援が完了するものがあります。時期繰越金は、それらに使用されます。

※当会計報告は、日本ユネスコ協会連盟が公認会計士および監事による監査を受けた計算書類をもとに、個別の活動のようすをわかりやすくお伝えするためにまとめたものです。

感謝を込めて

日本ユネスコ協会連盟が行う教育復興支援活動は、
以下の企業・団体をはじめとする多くの皆さまから温かいご協力をいただいております。
この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。

 あいおいニッセイ同和損害保険株式会社	 赤城乳業株式会社	 アクサ生命保険株式会社	 旭酒造株式会社	 栃木ひいらぎ	 株式会社トランスクンテナ	 トレンドマイクロ株式会社	 南部化成株式会社
 株式会社アトレ	 NTTドコモグループ	 御苗場	 オリックス米国財団	 日本テトラパック株式会社	 宗教法人 日本テラワーダ仏教協会	 日本農産工業株式会社	 一般社団法人 日本の伝統を守る会
 花王株式会社	カトリック上野毛教会	一般社団法人 銀座通連合会	 グッチ ジャパン	 NIPPON HOTEL Hotel Metropolitan Tokyo Ikebukuro	 BASF We create chemistry	 株式会社フェドラ	 フォーエバーリビング プロダクツ ジャパン
 株式会社光明工事	 株式会社三喜	 三州ペイント株式会社	 株式会社ジェイアール 東日本都市開発	 復興支援 東北の物産販売 高校生プロジェクト in 岩見沢	 ブルーチップ株式会社	 Benesse®	 株式会社ベルセレージュ本社
株式会社JUN	株式会社 生薬高度利用研究所	GIORGIO ARMANI	 宗教法人真如苑	 株式会社マルヨネ	 三菱UFJフィナンシャル・グループ	 三菱東京UFJ銀行	 三菱UFJニコス
株式会社セレスポ	信用金庫	雑司ヶ谷 鬼子母神堂	 ソニー生命保険株式会社				力士会
株式会社セレスポ	一般社団法人全国信用金庫協会	雑司ヶ谷鬼子母神堂	ソニー生命保険株式会社				力士会
 株式会社 ソニー・ミュージックアーティスツ	 株式会社Tポイント・ジャパン	 東燃ゼネラルグループ	 東レ株式会社				

ご協力いただいた皆さん

- 個人募金者の皆さん 全国の個人募金者の皆さんからも多大なご支援をいただきました。
- 企業・団体の皆さん 上記でご紹介しきれなかった企業・団体の皆さんからもたくさんのご協力をいただきました。
- 子どもたちから子どもたちへ 幼稚園から大学まで、子どもたちや学生さんからも、東北の子どもたちのために心のこもったご寄附が寄せられました。
- ユネスコ協会・ユネスコクラブ・会員の輪 日本各地のユネスコ協会も継続した支援活動を行っています。また、維持会員・賛助団体会員・個人会員の皆さんからもユネスコ精神のもと、温かいご協力が集まりました。

※50音順・敬称略

東日本大震災子ども支援募金
ユネスコ協会就学支援奨学金

皆さまからのご寄附をお願いします

以下の「ユネスコ協会就学支援奨学金」の専用募金口座までお願ひいたします。

三菱東京UFJ銀行 神田支店（普）0297275
名義：シャ）ニホンユネスコキヨウカイレンメイ

領収書が必要な方は、お手数ですが、日本ユネスコ協会連盟までご連絡ください。

日本ユネスコ協会連盟へのご寄附は、寄附金控除等の対象になります。

お問い合わせ 03-5424-1124(9:30~17:30／土・日・祝日を除く)

日本ユネスコ協会連盟

第2次世界大戦後間もない1947年、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならぬ」と諱う UNESCO（国際連合教育科学文化機関）憲章の理念に共鳴した人びとにより、世界初の「民間ユネスコ協力会」が仙台に誕生しました。1951年に当初の目的である UNESCOに加盟した後も、UNESCO憲章に基づき、全国でさまざまな活動を展開しています。

さまざまな活動

東日本大震災子ども支援のほかにも、
下記のような活動を行っています。

世界寺子屋運動 “きょういくで、あしたへいく”

カンボジア、アフガニスタン、ネパールで、学校に通えない子どもや、教育を受ける機会を逃した大人たちに学びの機会を提供。貧困のサイクルを断ち切り、明日を生きる力を育てます。



世界遺産活動 “人類共通のたからもの、世界遺産”

世界の貴重な文化や自然を人類共通のたからものとして、次世代に伝える活動を行っています。カンボジアのアンコール遺跡群では修復事業や人材育成を行っています。



未来遺産運動 “日本のこころを、あしたへ伝える”

100年後の子どもたちに、日本の大切な自然や文化を伝えたい。そんな思いから、日本各地の市民活動を「プロジェクト未来遺産」として登録し、応援します。



青少年育成活動

ユネスコ協会ESDパスポート、子どもキャンプ、海外スタディツアー、出前授業、活動助成など、地域や学校と連携して次世代の育成を行っています。



公益社団法人
日本ユネスコ協会連盟

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-3-1 朝日生命恵比寿ビル12階
TEL:03-5424-1121 FAX:03-5424-1126
<http://www.unesco.or.jp> E-mail:nfuaj@unesco.or.jp